

福州華僑とキリスト教

——マレーシア・ペラ州シティアワン及びシンガポール訪問記

(筑波大学) 山本 真

はじめに

本稿は、福建省福州地区（福州十邑と呼ばれる。福州方言を話す地域。地図1参照）からマレーシアのペラ州シティアワン（sitiawan, 中国名実兆遠，地図2参照）及びシンガポールへ向けての移民に関する調査報告である⁽¹⁾。

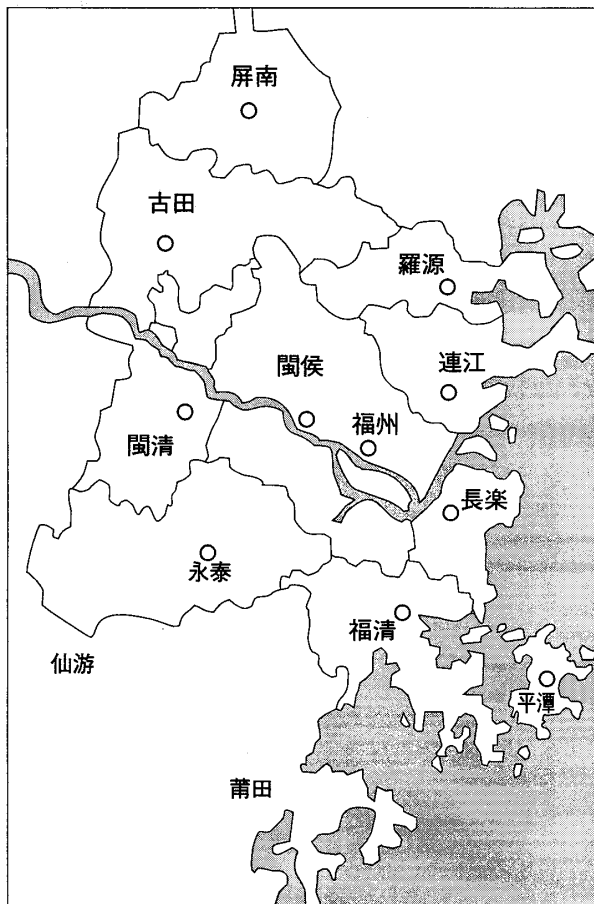
近現代とは、人々による海外への渡航が頻繁化し、海外からも人・物・金が流入することにより地域社会が世界と密接に結びついた時代である。それゆえ中国本土、特に華僑が多く輩出された地域（僑郷）における社会変容や華人世界におけるナショナリズムの形成過程を十分に理解するためには、海外華僑・華人の動向と中国における政治・社会状況とを相互連関的に捉えることが必須となる⁽²⁾。例えば福建省では、清末から民国にかけての時期に海外への移民・出稼ぎが盛んに行われた。具体的には1912年の省総人口約1,585万人が1947年には1,105万人へと減少したとされる（『福建省志 人口志』17頁）。その一方、1841～1949年の出入国統計では約187万人の出超となっており（『福建省志 華僑志』19頁）、海外への移民が人口減少の大きな要因となっていたことが窺知される。そして海外からの送金が福建経済に多大の貢献を為しただけでなく、シンガポール華人の陳嘉庚が集美師範学校や厦門大学を設立したように（小林2009）、人材育成という側面からも福建地域社会の変容を促進したのである。

本稿で主要な考察対象とする福州系華僑について見れば、1920年代末の『福州僑務公報』は福州十邑を中心とする福建北部からの華僑の総数を30万人以上と見積もっている。移民先はサラワクの

シブ（新福州）及びその付近で合計10万人余り、マレー半島のペラ州シティアワンに3万人、シンガポールに2万人、ジョホールのバトゥパハ及び永平（yong peng）に5,000人、マレー連合州及び非連合州に合わせて1.5万人、ジャワ、スラウェシ、スマトラに3万人、ミャンマーに1.5万人、台湾に7万人、日本に1.2万人とのことである（葉1928）。ただし福州系はシンガポールやマレーシアの華人のなかでも少数派に止まっていた（満鉄東亜経済調査局1941：67～70頁）。

これにも関わらず福州系華僑の動向に筆者が注目するのは次の理由による。すなわち20世紀初頭にキリスト教プロテスタントに属するメソジスト派教会⁽³⁾の主導下で、福州地区やその南隣の興化地区（莆田市、仙游県）から英領マラヤのシティアワンやイギリスの保護国であったサラワクへ向けての移民事業が展開された。このため移民を送り出した僑郷や移民先の華人コミュニティを分析するに際しては、同郷会館発行の資料や聴き取りによる口述資料に加えて、教会が蓄積してきた宣教師文書⁽⁴⁾を利用することが可能となる。長期間に亘り地域社会に密着した宣教師による観察・報告は一級の社会史資料である。さらに福州地区はメソジスト教会の重点的な布教地であったため、ミッション系学校が多数設立された。キリスト教の進出が地域の社会・文化に与えた影響を検討する上でも福州地区からのキリスト教徒移民の事例は格好の考察対象となろう。

またシンガポールは福州から英領マラヤやサラワクへ向かう移民の経由地であった。さらに一旦英領マラヤやサラワクに定着した移民が再度シンガポールに移住する事例も見られた。それゆえ、



地図 1 福州十邑位置

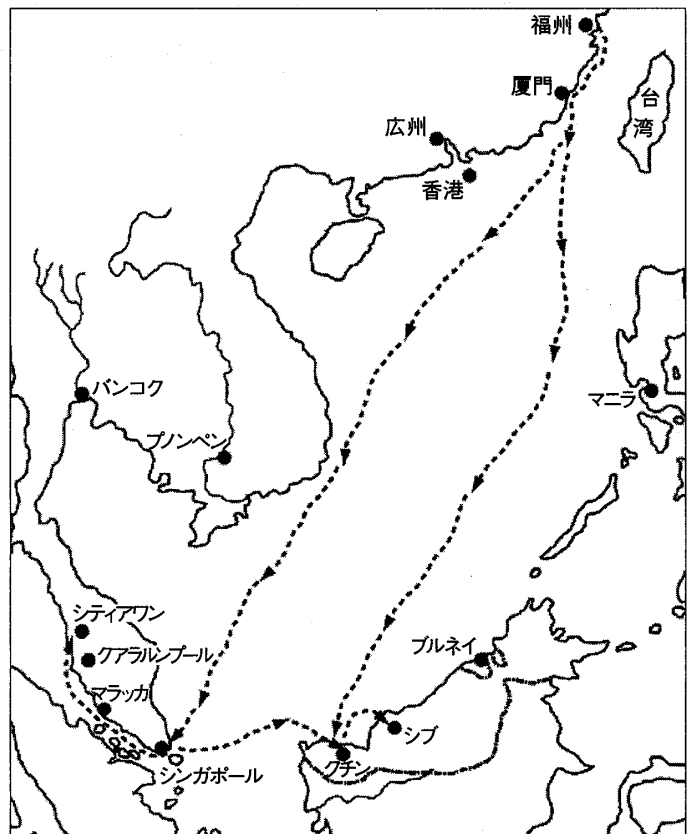
出所：黄孟礼2005掲載の地図を基に作成。

当該地域における華人史を研究するに当たっては、シンガポール国立アーカイヴに保管された華人の口述記録も有用である⁽⁵⁾。本報告では以上の資料群を組み合わせ活用することを通じて、僑郷側の社会状況、移民先におけるコミュニティの形成過程を双方向的に考察していきたい。

I. 福州地区からシティアワンへの移民

1. 移民の背景

現在マレーシアにおける福州人の集住地区はサラワクのシブであり、またペラ州のマンジュン郡 (daerah manjung) シティアワン区 (mukim Sitiawan) である。マンジュンの人口約20万人のうち、その半数を華人が占め、さらに華人のなかでは福州十邑に属する古田県出身者が2万人と最大数を占めるという (マンジュン古田会館辦事処



地図 2 福州から移民経路

出所：黄孟礼2005掲載の地図を基に作成。

での聴き取り、2010年11月22日)。

メソジスト派のキリスト教徒が中心となったサラワクのシブへの移民は既に1901年に開始されていた (山本2010)。これとほぼ同時期に英領マラヤ (マレー連合州) のペラ政府も食糧不足問題を解決するための措置を模索していた。そしてマレー連合州華民政務司のG.T.ヘーア⁽⁶⁾は1903年に中国からの農業移民の導入を建議したのである (銭2010: 78頁)。では植民地政府はなぜメソジスト教会を通じて福州からの移民を選択したのだろうか。この疑問に対しては、先行したシブへの移民が参考とされており、商人氣質の閩南系より福建北部の稲作農民が移民として適当と見做されたこと、さらに信頼できる仲介者が必要とされたことなどが理由として指摘されている (廖2009: 21頁; 施2003: 52頁)。なお教会は移民の召募だけ

でなく開墾地における社会建設にも中心的な役割を果たした。社会事業を積極的に推進する姿勢は19世紀後半から20世紀前半に提唱された社会福音の思想を背景としていえると考えられる⁽⁷⁾。

以上の歴史的背景の下、1903年にシンガポールのメソジスト教会マラヤ年議会はドイツ籍のH.L.E Luering牧師と福州府閩侯籍の林称美牧師を派遣し、閩侯県、古田県、福清県においてキリスト教徒を対象とした開墾移民の招募を行った。ただし先行きの不安は拭い去れなかったのであろう、当初1,000人を目標としたにも関わらず、実際には希望者は484人しか集まらなかった。そうしたなか林称美牧師は自らの故郷で移民の募集を行い一族の人々を移民団に加えることに成功した。ここから、教会が斡旋する移民事業にあってもリスクを伴う初期の開墾移民の募集には血縁や地縁という絆が重要な意味をもったことが窺知される（銭編2003：35～37頁）。

なお、林称美牧師の一族が移民に加わったことは以下のインタビューで確認できる。

Q：当時林称美林牧師と一緒に来たのはみな林姓ですか。大体何人ですか。

A：村人はみな林姓です。父は10人兄弟がみな来たと言っていました。大体10家族です。いとこたちがみな一緒に来たのです。

（LX氏、1930年生、林称美牧師の一族、祖籍：閩侯県、Kampung Koh〔甘文閣〕宣道堂、2010年11月26日訪問）。

2. シティアワン社会の形成における教会の役割
旅の途中で逃亡もあり、さらに人数を減少させたとはいえ、1903年9月に最初の移民363人がシティアワンに到着し現在のKampung Koh地区（中国語名は甘文閣、Kampungはマレー語で村の意味）に定住した。その後2,500エーカー（1エーカー＝4,047平方メートル）の土地が5年間免税

の条件で、移民の籍貫に基づき古田人、閩侯人、福清人を単位として分配された（廖2009：26～29頁）。入植者のなかに多くのキリスト教徒が含まれたため、移民社会は教会を中心として発展していった。ペラ政府との契約にも開墾の請負人（すなわちメソジスト教会）が移民と政府の間をつなぐ事務を行うこと、ペラ政府駐在官（resident）が必要に応じてheadman（頭人）を任命して紛糾の調停を任せることなどが盛り込まれていた。教会は中国人牧師と西洋人の宣教師の協力の下運営されたが、このheadmanの役割は事実上中国人牧師が担うこととなった（銭2010：59頁）。

開墾協定は教会が10エーカーの土地を会堂と牧師館の建造のために、さらに2エーカーの土地を学校設立のために保留することを認めていた。また1903年に宣教師としてシティアワンに赴任したB.F.Van Dykeは孤児院を設立し学校を付設したが、これは1916年には英華学校（Anglo-Chinese School）に発展していった。さらに教会が1906年にSitiawan Mission Plantation Limitedを設立、1910年からはゴム栽培を導入したことにより開墾区の経済は安定した。医療施設は大幅に遅れ、1935年に設立された（施2003：128～137頁；陳2003：22頁）。

以下では、シティアワンの中心教会である宣道堂の現任牧師である廖克民氏からの聴き取りに基づき当教会の歴史を紹介したい。

Q：宣道堂の歴史と現在の状況を理解したいのですが。

A：他の教会の歴史とは異なります。この教会（宣道堂）の歴史は開墾の歴史とともにあるのです。1903年にその歴史が始まりました。地域での発展には三つの方面があります。社区の開発、宗教と教育です。宣道堂の向かいにあるAnglo-Chinese Schoolは1903年に始まったものです。開墾の初期にはこの地方は教会により指導され

ました。小さな団体から大きな社会になったのです。宗教教育と経済から始まりました。1910年代はゴムが最も熱を帯びた時期でした。そのころの1907年前後にMission Plantationという会社を通じて一層多くの人々をここに引き寄せました。後から来た人々はここに来てから教会に加入したのです。平日には働き、日曜には礼拝に来ました。教会は華人社会と良好な相互関係を有していました。非キリスト教徒も教会に来て結婚式を行うことができました。教育については華人の牧師は華人の子弟の教育を重視しました。1919年か1920年に華語学校が創設されました。この華語学校は牧師が主導して始まったものです。

Q：（現在）シティアワンの教区にはどれくらい教会があるのですか。

A：初期はシティアワン教区といい、現在はマンジュン教区といいます。14の教会と14の伝道所とさらに5つの布教所があります。布教所というのは創設したばかりで信徒の人数が規定の人数に達していないものです。

（廖克民牧師，1968年生，祖籍：福建閩侯人，宣道堂，2011年11月23日訪問）。

また地域社会における教会の機能については一般の信徒からも聴き取りを行った。

Q：お父さんはいつキリスト教徒になったのですか。

A：こちらに来てからです。

Q：こちらに来てからどうして信徒になったのですか。

A：こちらには牧師がいて、牧師が家に来て伝道しました。当時の高季恩牧師は漢方を知っており、多くの人が彼に治療してもらいました。それで教会に通うようになったのです。

Q：以前は牧師が病気を治すことができたので、

みなが教会に行ったのですか。以前の教会は民衆のためにどんなことをしましたか。

A：牧師の地位はとても高かったのです。英国政府との交渉に責任をもっていました。民衆は問題があると牧師に助けを求めました。

Q：キリスト教徒は問題があると牧師に頼んだとして、非キリスト教徒はどうしたのですか。

A：知りません。

Q：当時同郷会はありましたか。

A：同郷会は後になってできました。最も早い同郷会は三山同郷会のはずです。三山同郷会は福州人の同郷会です。同郷人は何かあれば同郷会を頼ります。

（LY氏，1920年生，祖籍：福建仙遊，シティアワンPekan Gurney〔三条路〕，2010年11月24日訪問）。

では非キリスト教徒は問題が発生すると何に頼ったのだろうか。これについては、次節の三山同郷会（閩侯県人の同郷会）での聴き取りのなかで、「廟である」との回答を得ることができた。例えば元来福州閩侯県の民間信仰であった陳六公廟⁽⁸⁾はシティアワンのSimpang dua（二条路）にも廟が設けられている。筆者は福建南西部を考察した別稿において血縁、地縁、神縁（宗教）が重層的に紐帯となり社会が編成されていたことを指摘したが（山本2011：197～200頁）、シティアワンの華人社会においても同様の社会構成原理を見出すことができるだろう。

3. シティアワン社会の発展と同郷会の成立

このように開墾地は教会を中心に発展していったが、その一方で開墾移民の派閥意識には強いものがあつた（Minute of the Twenty-second Session of the Malaysia Conference 1914：p.41）。同じ福州地区出身でも県ごとに方言に違いがあることが、派閥（同郷）意識の背景として重要であると思わ

れる。さて、ゴム栽培の成功により開墾地が経済的に安定すると、血縁や地縁を頼って後続の移民が流入した (Coole1928: p.10)。このことは出身地ごとに集住した古田、閩侯、福清出身者による同郷コミュニティの組織化を促した。例えば教会による学校が1916年に英語教育を受ける英華学校 (Anglo-Chinese School) として制度化されるなかで、古田、閩侯、福清の各コミュニティは独自に華語学校を設立したのである。これら同郷コミュニティの役職には華人牧師あるいは牧師の息子などが個人の資格で就任したため、同郷学校は教会の影響下には留まったものの、教会の直接管理からは距離を置くものとなった。

さらに中国同盟会の影響下の益智書報社、中華革命党の実兆遠分部、益群社などの国民党系の団体も比較的早くから組織された (『哀思録』8頁)。その後益群社は他の団体と合併し、1935年に全華人を包摂する中華総公会に発展した。日中戦争が勃発すると本国援助の募金活動 (籌賑) が積極的に行われたため、太平洋戦争中に当地を占領した日本軍は中華総公会の主席を殺害する挙に出たのである (『曼絨中華公会会史与会務発展』発行年不明)。

事例 1 三山同郷会

先に示されたように三山同郷会 (閩侯人の同郷会) が最も早くに設立された同郷会であった。以下三山同郷会での聴き取りを紹介する。

Q: 三山同郷会の歴史と現在の活動は。

A: 三山同郷会は第一世の開墾者が設立したものです。主に閩侯人です。林称美牧師の息子も我々同郷会の会長を務めました。先人が同郷会を設立したのは主に相互に助け合うためです。まず教会の会堂を作り、次いで学校を設立しました。同郷会は1929年成立しましたが、きっと我々が最も早い社会団体でしょう。

Q: 最初に来たのはみなキリスト教徒だったのですか。

A: そうです。

Q: 後には (教会ではなく) 友人や親戚の関係を頼って来たのですか。

A: そうです。

Q: 後に来た人は教会に頼れないので、同郷会を作ったのですか。

A: そうです。我々は学校を建てました。学校は公のものです。我々閩侯人は育智学校を建てました。最初は教会の属下にあったのですが、後には教会から離れました。

Q: あなたがたの同郷会の成立は学校を設立するためだったのですか。

A: そうです。

Q: 初期には誰が先生を務めたのですか。

A: みな中国から来ました。

Q: 特別に招聘したのですか。

A: 大部分は同郷の紹介です。中国から招聘しました。多くは学者でした。

Q: 方言で教えたのですか。

A: 最初はそうでした。後には中国に追従し白話文を教えました。

Q: いつから華語 (標準語) を教えたのですか。

A: 大体1940年代です。私はそのころ学校に行きましたが華語を使っていました。中国の教科書を使いました。上海で出版されたものでした。課程は中国のものを採用していました。

Q: あなたは注音符号がわかるのですか。

A: はい。学んだのは注音符号でした。

Q: あなたが小学校の時、先生の話す華語は標準的でしたか。

A: 標準的ではありませんでした。とても聞きにくかったです。

Q: ここでは教会の影響が比較的大きく、問題があると牧師を訪ねたということですが。

A: そうです。

Q：非キリスト教徒の場合、問題があれば誰に頼めるのですか。

A：廟です。

Q：どのような廟ですか。

A：本地には龍文廟や陳六公廟があります。

Q：福建古田の林水夫人宮はありますか。

A：一緒に祀っています。

(Z氏〔会長〕, 1939年生, 祖籍：閩侯；C氏〔会長代理〕, 1947年生, 祖籍：閩侯, マンジュン三山同郷会会所, 2010年11月25日訪問)。



シティアワン古田会館（2010年11月，筆者撮影）

事例 2 古田会館

引き続き、シティアワンでの最大規模の同郷会である古田会館を紹介する。シティアワンのなかでもAyer Tawar（中国名愛大華）は1918年以降に大規模な開墾が開始され、古田人が集中した地区であった。Ayer Tawarの古田人は1920年に培民小学校を創建したが、これが後に古田会館へと発展した（曼絨古田会館 1994：64～65頁）。

Q：古田会館の状況，歴史と主な活動を理解したいのですが。

A：1954年に政府へ登録し許可を得ました。ただし成立はもっと早いものでした。古田人は教育を重視します。小学校を一箇所設立しましたがこの学校の理事会は古田人の当地での指導者で

した。Ayer Tawarでは第二次世界大戦が始まると状況が混乱しましたが、(戦後の)緊急法令⁽⁹⁾のために人民の生活はさらに苦しいものとなりました。人民の生活空間は囲まれた特定の地区に限られ、朝そこから仕事に出かけ、夜戻ってくると(居留区から)外出できませんでした。あの時期は中国との連絡も中断しました。郷民はみな故郷に錦を飾りたかったのですが、状況が許さなくなりました。人々は墓地を作ろうとして土地を買いました。土地使用の用途変更の申請は容易ではないので会館を設立し、その助力の下で問題を解決しようとしたのです。すなわち1950～1951年ごろに会館を組織し、1954年に成立しました。成立後、墓地は最も重要でした。その他は教育です。1960年代になると学費の貸与を始めました。積極的に事業を推進し、多くの人材を育成しました。現在までで100～200人の専門職の人材を育成しました。それから交流活動で、会館の毎年の宴会です。

Q：会館の現在の活動は？

A：会員は現在2,200人余りで、永久会員は一回に会費を200リンギッド（1リンギッド＝30円程度）、普通会员の会費は毎年12リンギッドです。古田の墓地は会館が自ら土地を買ひ、それを会員や非会員に売り出します。学費の貸与と奨励金もあります。奨励金は毎年1万リンギッド用意します。収入の来源は主には墓地や礼堂の貸出、店舗の賃貸料です。

Q：当地の古田人は会館に大部分が参加していますか。

A：大体60%ぐらいです。初期はきっと85%以上でした。ある時期我々は会館には意味がないと思っていました。ただし中国経済が開放してからは会館が中国の地方との連絡に大きな助けとなりました。会館の役割に変化があったのです。

A：早期の会館には善後部というのがありました。葬儀の費用がとても高く負担できないため、

会館には善後部というのがあったのです。

A：初期には婚姻登録もやっていました。同郷の人が結婚すると会館で登録をしていたのです。

Q：現在古田会館と中国の古田とは往来がありますか。

A：会長と古田には親密な往来があります。商売です。

A：会長は福州に投資して道路や橋を建設しました。現在はそれを現地の政府に委ねています。

Q：会館は金銭を古田に寄付しているのですか。

A：しています。ビルを建設するのを助けました。

A：古田の玉田中学はシブの古田人が発起したのですが、この人も寄付しました。

(D氏, 1933年生, マンジュン古田会館役職者, 祖籍：古田県；C氏, マンジュン古田公役職者, 1946年生, 祖籍：古田県, マンジュン古田会館, 2010年11月22日訪問)。

II. シンガポール福州会館とメソジスト教会 福霊堂

1. シンガポール福州会館

福州人の大規模な南洋への移民は閩南人（泉州・漳州系）よりもずっと後れ、概ね19世紀末あるいは20世紀初めのこととされる。記録に残るなかでは、閩清人の徐季鈞が比較的早期にシンガポールに渡った福州人である。徐は福州の英華書院（後述）の元教員であり、1892～94年ごろにシンガポールに赴き、『叻報』⁽⁴⁰⁾で職に就いた。また閩清人でキリスト教徒の黄乃裳⁽⁴¹⁾の娘である黄瑞裳が1896年にシンガポールの名士林文慶⁽⁴²⁾と結婚したが、黄乃裳自身も革命派への弾圧を逃れるため1899年にシンガポールに渡ることになった。次いで1900年には娘婿の林文慶の紹介を通じサラワクに赴き、現地政府と契約を結び開墾事業を開始したのである。

民国時期になると福建での社会混乱の影響により、南洋へ渡る者は一層増加し、シンガポールに

おける福州人は1921年に1万2,863人となっていた。福州人はロッチャー河畔, Queen Street, Wallich Street, Tras Streetに集住した。この一帯はシンガポールのチャイナタウンの中心地・牛車水からは東北に1キロ以上離れている⁽⁴³⁾。また「三刀」（包丁、鋏み、理髪刀）を自称したように、少なからざる福州人は調理師、理髪業や裁縫業に従事した。

1907年に福州で水害が発生すると、福州籍で植民地政府の官吏であった孫子善を中心に救済計画が練られた。これを契機に会館の設立も討議され、1909年に孫を初代総理として福州会館が成立した（ちなみに泉州・漳州系による同郷組織である恒山亭はずっと早く1828年に樹立されている）。会館では会員の福祉を図るために相互連絡、職業の紹介、紛糾の仲裁などの業務が行われた。同郷学校も1914年に開学したが、短期間で停校となり、1924年に再開されたものの3年後、不景気のため再度停校となった。そして第二次大戦の混乱を経て1945年によりやく軌道に乗ったのである（新加坡福州会館2010：1～3章）。

2. シンガポール福霊堂

シンガポール及びマラヤにおけるメソジスト教会の歴史は1885年に始まるが（Lau 2008：p.1）、福州人を信徒とした福霊堂（Singapore Foochow Methodist Church）はその直後の1897年に設立された。福州からの労働者にはキリスト教徒も含まれており、礼拝を行う場所や福州方言で説教可能な牧師が求められた。これにより福州のメソジスト教会は閩侯籍の林称美牧師をシンガポールへ派遣した。林は1897年にシンガポールに到着すると福州方言での布教を開始し、福霊堂の初代牧師となった。なお既に述べたように、シティアワンへの移民召募に活躍したのもこの林牧師であった。当初は福霊堂独自の礼拝堂はなくMiddle roadのメソジストミッションの礼拝堂やColeman Street

の英華学校に間借りして礼拝を行ったが、その信徒数は100人に満たなかったという。

福霊堂で最も長期間牧師を務めたのは古田県籍の陳観斗氏（任期1931～46年）であり、その任期中に独自の会堂をRace Course Road（すなわち福州人の集住地区）に所有することに成功した。陳牧師の経歴は後述するが、古田県人によるサラワクへの移民事業や、シティアワンでの牧師職、そして教会の機関紙『南鐘報』の編集に尽力した人物であった。陳牧師を後継したのは福清籍の高季恩牧師（任期1947～1959年、経歴は後述）である。1948年からは福州方言に加え華語での説教も行うようになり、その離任時には信徒は250人にまで増加した。またこの時期に会堂の拡張が行われた（本堂設教九十周年記念刊編輯委員会1987：43～45頁）。なお祖父が福州古田からサラワクのシブへの移民であり、自身はシブからシンガポールへ渡り商人として成功したL氏は「私は福霊堂に宿泊しながらYMCAに通って勉強しました。ここには親戚はいなかったのですが、福州人なので福霊堂に住んだのです」（L氏、訪問時90歳、福霊堂、2011年3月27日訪問）と述べている。ここから教会が信徒の福利に貢献していたことも窺知される。



衛理公会（メソジスト）福霊堂，シンガポール，2011年3月筆者撮影。

3. 福霊堂牧師の出身家庭，社会的背景

福霊堂へは福州の教会学校において教育を受けた牧師が派遣された。以下福霊堂で牧師を務めた陳観斗氏及び高季恩氏の事例から彼らの家庭環境，学歴，南洋への渡航の理由を考察したい。なお陳牧師についてはその親族のD氏（福霊堂、2011年3月27日訪問）から提供された手稿の自伝『観斗年譜・家族簡史』1964年を、高牧師についてはシンガポール国立アーカイヴ所蔵の口述記録を資料として利用した。

事例1 陳観斗牧師（生没1882～1964年）

陳観斗牧師は古田県北部の平湖鎮出身である。上記のD氏によれば陳姓は地元では有力な一族であったという。陳牧師の父（1839～1904年）は富裕な商人であり、メソジスト派古田教会の執事を務めていた。またその母も極めて敬虔な信徒であったという。陳牧師は幼少時には家塾で学んだが、11歳で古田培元書院（メソジスト教会の創建、後の超古中学）に入学、さらに福州の英華書院へ進学後、サラワクへの移民事業に協力したり、古田県で伝道に従事したりした。1904年に英華書院を卒業後は、華南女子大学や福建協和大学で教鞭をとった。1922年にはメソジスト教会と密接な関係を有するシカゴのノースウエスタン大学へ留学する機会を得た。24年に修士の学位を取得し帰国、華南女子大学に復帰したが、おりしも中国で反キリスト教運動が高揚するなかで何者かに襲撃を受けた。国民革命の後の1927年夏に華南女子大学から休暇をとりマレーに渡り、シティアワン宣道堂の牧師となった。1931年にはシンガポール福霊堂の主任牧師に転じ、日本による占領時期も福霊堂牧師としてシンガポールに留まった。1946年に中国に帰国、1948年にはシンガポールに戻り三一神学院¹⁴⁾の教授に就任した。1952年70歳で退職し、自由伝道に従事した。このように陳牧師は福州付近の古田県の富裕な家庭の出身であり、福州の教

会学校で教育を受け、教会と関係の深いアメリカの大学に留学した。帰国後、福州で大学教授職に就いたものの中国で反キリスト教運動が強まるなか、シティアワンやシンガポールに渡り牧師・編集者として活動した人物であった。

また『観斗年譜・家族簡史』にはその兄弟姉妹、子供たちの経歴が記されていて極めて興味深い。以下やや長くなるが一族の経歴を紹介したい。

兄のA氏（1880～1963年）は古田培元書院、福州英華書院、北洋大学鉱務専科を卒業後、広州、湖南、湖北、雲南などで働いた。日中戦争により業務に損害を蒙り1947年に古田県に戻ったものの共産革命により家産を没収された。その弟のB氏（生没年不明）は福州英華中学卒、福州協和大学学士、当初教育界で働いたが、後に商業界に転じた。日中戦争時期は雲南の昆明での事業に成功し、戦争終了後上海に戻ったが、共産革命により財産を没収された。上の姉は牧師と結婚するも早逝、下の姉は古田人と結婚し、その子供は1914年にマレーシアに渡り、シティアワンに居住した。4人の妹のうちC氏は福州の華南女子大学の前身を卒業、海軍医官と結婚。D氏はアメリカの大学で修士号を得て華南女子大教授を務め、アメリカ留学のエンジニアと結婚した。E氏は華南女子大学文学士、学校校長、孤児院校長を歴任。F氏は華南女子大学学生を経て米国大学の医学修士と結婚した。

陳牧師の長女は早逝、次女のG氏は華南女子大学文学士、ミシガン大学修士、ワシントン大学博士、アメリカの大学で教職に就いた。長男のH氏は福州の英華中学、南京金陵神学院卒、1938年にマレーシア華人年議会に加入、1940年に正牧師に就任、シティアワン教区主任を務めた。次男のI氏は福州の英華中学卒、厦門大学商学士、1938年に南洋に赴き教員となりその後シンガポール中国銀行会計科副主任となった。三男のJ氏はシンガポール英華学校卒、教員となった後、商業に転じ

た。次女のK氏は華南女子大学卒、シンガポール大学教育学士、衛理女校副校長。四男のL氏は英華中学卒、北京燕京大学理科学士、エンジニアとなった。1949年以後中国に留まり福建において電力エンジニアとなった。

ここで注目されるのは陳家のうち少なからざる者が福州の英華中学、華南女子大学、福建協和大学で教育を受けていることである。英華中学（原名鶴齡英華書院、Anglo-Chinese College。後に英華中学）は1881年にメソジストミッションにより設立され、英語教育には特に力点が置かれた学校である（福州市英華校友会 2006：第一章）。なお国民政府主席を務めた林森（閩侯籍）も英華書院で3年間学んでいる。華南女子大学は1908年にメソジストミッションの女性宣教師により華南女子学堂として設立され、1916年に華南女子大学（HwaNan College）に改組された（朱2002）。福建協和大学（Fukien Christian University）は1912年にメソジスト、アメリカンボード、聖公会、アメリカ改革派教会などにより設立が準備され1916年に成立、後に人民共和国では華南女子大学と合併し福建師範大学となった（謝 2004：124～130頁）。

陳牧師の兄弟姉妹、子供達が教会系の中等、高等教育機関で学んだ後に、教育界や実業界で活躍していることから、ミッションスクールは陳一族にとって社会的上昇の重要な背景となっていたと判断できよう。また彼・彼女らのうち多くの者が福州の外に出て活躍していることも注目される。

ところで、反キリスト教暴動（教案）などの事例から、一般に貧しい人々が教会による援助を期待してキリスト教徒となったとの認識がもたれる傾向があり（いわゆるライスクリスチャン）、事実同時代の人々もそうした認識を有していた。例えば、1935年にシンガポールへ渡ったある人物（1922年生、閩侯籍、1980年に福州咖啡酒餐公会主席。非キリスト教徒）は以下のように述べている。

辺境に教会は容易に介入できます。なぜなら貧困な者が多いからです。教会はそこに行って学校を開設して無料で教育を授けるのです。また看護師もいます。教会には外国の膨大な資金があります。貧困な人々は比較的容易に感化されて彼らの教会に加入します。生活水準が比較的よい人々、家庭の背景が比較的よい人々を信徒にすることは困難です。それゆえ福州市で教会が発展するのは後になってからです。中国においては、私はこう思うのですが、教会が中国に入っていくのはみなこのようにしてです。

(Oral history Centre, Project title :Chinese dialect groupe Hokieu. Accession No.550, THIAM Yew Tong 1985年記録, National Archive of Singapore)。

また以下で口述記録を紹介する高季恩牧師の家庭は、貧困にあったなかでキリスト教に入信した事例といえる。ただし、キリスト教徒になるのは必ずしも貧しい人々とは限らなかった。既に述べたように陳牧師の父は富裕な商人であった。また林称美牧師の一族についてもほぼ同様のことが指摘できる。マレーシアにおける閩侯盤嶺籍林氏の族譜である『天定州砂拉越閩榕盤嶺西河林氏族譜』(1974年)によれば、林牧師は当初科挙の生員の試験を目指しており、これに失敗し牧師になったという。生員を目指す以上貧しい家庭の出身ではなかったはずである。さらに林氏の族譜を見ると、一族は福州の英華書院などで教育を受けた人材を輩出している。このように陳、林一族にとってミッションスクールはさらなる社会的上昇の大きな社会的資源であったといえよう。

事例2 高季恩牧師

陳牧師に次いで福靈堂の牧師を務めたのが高季恩牧師であった。高牧師は1913年生まれ、父は牧師であり、4人兄弟、3人姉妹の家庭であった。4人兄弟の内2人は福州の英華学校を卒業、また4

人のうち2人は牧師に、2人は建築エンジニアとなった。特にその弟の高季忠牧師はシンガポール衛理公会(メソジスト教会)の会督(bishop)までを務めている。高家は先に紹介した陳家と異なり元来は貧しかったため、教会及び教会教育を経て社会上昇を果たした典型的事例と言えるだろう。また高牧師が南洋に渡る背景としては故郷における治安の悪化、匪賊の跳梁が語られている。以下は高牧師の口述記録の抄訳である。

父は光緒3年に平潭県東美郷で生まれました。家は貧しく男兄弟は二人だけでした。二人とも学歴はありませんでした。父が21歳の時に外国の宣教師が郷里に来て伝道しました。宣教師は祖父に対し父を学校に通わすことを勧め、書物を与えただけでなく学費を支えるための仕事も斡旋しました。その後父は伝道への従事を志願し、福州の神学院で学んだのです。卒業し他所で伝道師として働いた後に平潭に戻ってきて牧師となりました。働きを認められ平潭の教区長となり13の教会を管理したのです。

私の祖父母の時代は全郷(東美郷)でキリスト教を信じている者は誰もいませんでした。みな迷信を拝んでいました。祖父はまじめでしたが貧しかったのです。一家は魚をとったり土地を耕したりして生活していました。祖母が喘息のような病に罹りとても苦しみました。祖父は元々熱心な仏教徒でしたので、あちこちで仏や神を拝んでは薬を買ってきたのですが、効き目はありませんでした。ある日祖父母が野良仕事に出ると外国人の宣教師が田園の樹木の下で説教を始めました。外国人ですが言葉がとても上手でした。アメリカ人でした。説教を聴いて「妻は喘息がこんなにひどいのですが治すことができますか」と訊ねると、その宣教師は「信仰があれば可能です」と答えました。それで夫婦ともに信徒となりました。しかし村に帰ると人々

は洋教を信じるのは祖宗の習慣に違反するとして祖父一家を追い出そうとしました。色々嫌がらせをされました。井戸の水を飲ませない、祖父の田畑に牛や羊を放つなどです。大きな石を家に投げこまれたりもしました。

宣教師は県城に住んでいてしばしば村に来ました。父を県城に連れて行って勉強させました。宣教師は後に病院や学校、そして礼拝堂を開設しました。父が学校に行つて勉強するようになると我が家の立場も変わってきました。また地元で勢力をもっていて我が家を敵視した家族はみなでアヘンを吸ったため衰退していききました。後には郷の大部分の人がキリスト教徒となりました。父が牧師となって故郷に帰ると人々は大哥哥（兄さん）と呼ぶようになったのです。

私はというと平潭の小学校を終えてから福州の協和中学で学びました。幾つかの教会が連合して設立した学校です。卒業後父は私に医学を学ばせようとしてしました。中医（漢方医）です。それで福州の中医専科学院で6年間学び卒業後に漢方医となりました。東美郷に戻って開業しましたが、当時は匪賊がとても多くいました。ある日使いの者が来てその父が重病なので30華里〔約15キロメートル〕の道を往診に来て欲しいと私に依頼しました。その時たまたま一族の叔父さんが入ってきたのですが、その様子を見て私を止めました。「聞いたことがないのか。今は匪賊が木の葉よりも多いんだぞ。行ったら誘拐されるぞ。今は医者がいかにカモだ。金はあるし、誘拐するのも簡単だからな」。叔父さんが理由をつけて往診を断ってくれました。往診を依頼した者は隣の郷の医者を頼みましたが、この医者は船に乘せられ南日島の付近に連れて行かれました。あそこは匪賊の地盤でした。医者は指を切り取られ血書を書かされました。二千大洋銀〔民国時代の銀貨〕の身代金でした。これを聞いて父は私に医者を辞めさせ、小学校の

教師をさせました。嵐華小学校です。1ヶ月教えていやになりました。ちょうどその時姉がペラのシティアワンにいたのですが、そのKampung China〔シティアワンの福清人地区〕に育英学校というのがあり、その校長に招聘されました。そのためこちらに来て校長になったのです。1936年のことでした。中国には匪賊があまりにも多くいました。仕事がなかったからです。それに小学校も私が好むものではありませんでした。こうして南洋に来たのです。当時南洋に来るには申請する必要はありませんでした。パスポートもありませんでした。南洋に来るのは簡単でした。福州に出て船の切符を買いました。一枚だけ残っていて値段はたった120元でした。福州では5〜6人の福州人と出くわしました。彼らも南洋に来たがっていました。当時は匪賊があまりにも多く、また徴兵されるため、若い者はみな南洋に来たがっていました。（Oral history centre, Special Project: Rev.Kao James Jih Eng, Accession No.000593, National Archive of Singapore）。

高季恩牧師は1936年にシティアワンに渡り、その後1年ほど教員を務めた後にシティアワンのPekan Gurney〔三条路〕にある教会（三一堂）の代理伝道となった。1942年には日本軍占領時期に三一堂の正牧師に就任、1946年にシンガポール福靈堂の牧師に転任したのである（陳1993：60〜61頁）。

Ⅲ. 移民の背景としての福建の経済、治安問題

以下では聴き取りとシンガポール国立アーカイヴ所蔵の口述記録に基づき、南洋への移民の背景となった福建の社会経済状況を紹介したい。

1. 農村経済の状況

農村経済の状況について程耀棠氏（1922年、閩侯籍、1935年にシンガポールへ渡り、コーヒーショップを経営、1980年に福州咖啡酒餐公会主席）が語る記憶を紹介する。

3～4 畝の土地があれば、平原にあればですが、一家数人の生活は問題ありませんでした。もし土地が高山区にあれば、1年の収穫は1季だけなので早魃の時には問題になりました。灌漑は人力を主としていました。山の上の水源を利用していました。しかし早魃に遭うと問題が発生しました。すなわち兄弟が多い者が兄弟のいない者を圧迫したのです。こういうことは古い封建家庭では日常茶飯事です。村のなかで普通に生活できる者が50%、貧困な者は40%であって、地主の類は比較的少なかったです。地主は農地を多くもちそれを小作に出しました。小作が収穫するとその60%から70%を要求しました。貧しい家はとても貧しいため、農業以外に暇な時に閩江の渡し舟の仕事をしました。我々の村は閩江に近かったのです。閩江では木材や運輸の仕事がありました。1年のうち3～5ヶ月の間村から出てきて様々な仕事をして家計の足しにしました。

（Oral history centre, Project title : Chinese dialect groupe Hokien, Accession No.550, THIAM Yew Tong, National Archive of Singapore）。

2. 治安状況との関係

事例 1 軍閥による収奪

1913年の第二革命以後、福建は長きに亘って北洋系外来政権の統治下に置かれた。安徽派の李厚基が1914～22年まで、直隸派の孫伝芳、周蔭人は1923～26年の北伐まで福建を支配した（徐2009：283頁）。外来政権による収奪と治安の悪化が福建の民衆を苦しめたため、南洋へ活路を求める者が

続出した。以下では当時の社会状況を語るある人物（1906年福州生まれ、理髪師、19歳でシンガポールへ渡航）による口述記録を紹介する。

私の理解では、当時は満清が倒れ、国民党が統治しましたが、国内ですら統一できませんでした。一省は一省で自ら統治する自治権がありました。自ら自分の省を管理していたのです。それゆえ、当時の福州の政治は十分に正常ではなかったといえるでしょう。まじめな者は海外に行き生活を模索しましたし、そうでない者は悪者のところへ走って匪賊になりました。当時福建にはとても多くの匪賊がいました。匪賊といえば南方には陳国輝、北方には盧興邦がいました。これらの賊はとても野蛮でした。大きな村は彼らを接待しなければならなかったのです。もし彼らの求める物を与えないと、様々な嫌がらせを受けました。それゆえ当時福州の民衆の生活は苦しかったのです。政府の統治といえば、当時は北方の人間、李福基〔李厚基—筆者〕によるものでした。彼は北方から来て福建の情勢にはあまり詳しくありませんでした。彼の兵隊は、見かけではあたかも頭の大きなベンガル兵のようでしたが、実際に戦わせると、戦えなかったのです。彼らは死を恐れました。彼らに田舎に行って任務を遂行しろと命令しても、行くのを恐れました。それゆえ、田舎は無政府状態となったのです。匪賊がこのように政府に打撃を与えたのです。こういう状況でしたので、民衆はみな苦しみました。金持ちが苦しまなかったという訳ではなく、金持ちも苦しんだのです。金持ちは誘拐されました。身代金を要求されました。金がない者はというと、もっと苦しく、生きていく力がなかったのです。

私は中国では行商をしていました。中国では軍閥の時代でした。やつらは戦争となると人を捕まえて荷物を担がせました。福州から他省ま

で行かせました。もしやつらに連れていかれて、生きて帰ってこれたらとても幸運でした。生きて帰れた者はとても少なかったのです。毎日恐れて逃げ廻っていたため、行商ができなくなりました。当時私は既に福州に出てきていました。福州の西門の外側、大賽のところでした。そこには果物を専門に売る者が集まっていた。福州では毎日逃げ廻っていてどうしようもありませんでした。やつらは男が捕まえられないと女も捕まえませんでした。男も女も捕まえられないと老人を捕まえませんでした。だから当時は暗黒でした。これは福州だけではなくて他の場所でも同じでした。

当時は南洋に来るのは簡単でした。なぜなら南洋はまだ発展中だったからです。労働力が欠如していました。一部は南洋の政府が代理人を通じて労働者を募集しました。一部は私のように自分でやって来ました。私は客棧に行きました。私が南洋に行きたいというと、彼らがうまくやってくれたのです。ただし福州でも出国の手続きは行わないし、南洋の政府も手続きを行いませんでした。向こうに着いてから政府が病気がないかどうか検査を行い、病気があるとセントジョーンズ島に行き治療され、病気がないようなら上陸を許されました。

(Oral history centre, Project title : Chinese dialect groupe Hokien, Accession No.000083, Mr.Liaw Ching Sing, National Archive of Singapore)。

事例 2 匪賊による誘拐

父はメソジスト教会を頼って南洋に来ました。当時アメリカの宣教師が既に伝教しており、私の父母も信徒になっていました。現在のメソジスト教会です。当時政府は強くなく、匪賊がとても多くいました。私の父と祖父は匪賊に誘拐されました。祖父が先に逃げましたが、怖くて家にいられないので親戚のところに寄寓しま

した。父も教会へ逃げ込みました。祖父はこのことを知って急いで父を南洋に送ったのです。

当時、仙遊には匪賊がいるだけでなく、さらに政府軍がいました。聞くところによると、地元の人は政府軍を匪賊より恐れていました。政府軍が来ると白昼からあれやこれや物を要求します。ひどい者は女の子まで連れて行きます。地元の人はこれら兵隊を非常に恐れたので南洋に移民したのです。私の父は匪賊の迫害を恐れて南洋に来ました。実際に多数の興化人が南洋に来たのは匪賊と北洋軍の迫害を恐れたからです。祖母が祖父の意を汲んで教会に手配してもらいました。

(L氏, 1936年生, サラワク州シブ市, 2011年11月25日訪問)。

事例 3 国民党政府による徴兵

1926～27年にかけての国民革命により北洋系政権が打倒された後も、福州の国民党政権の実力は弱く民軍と呼ばれる地方軍事勢力の割拠状況が継続した。さらに福建西部では共産党の革命根拠地が建設された。これを討伐するために福建に進駐した19路軍は1933年に福建人民革命政府を樹立し国民政府からの独立を宣言したが、蔣介石により鎮圧された。その後共産党勢力も駆逐され国民党政権による平和が訪れるかに見えたが、間もなく日中戦争が勃発することとなった。このように福建における動乱は極めて長期に亘ったのである。

日中戦争時期にあつては、国民政府による徴兵から逃れるために南洋へ脱出するものが続出した。例えばインドネシアの華人財閥サリム・グループの創始者として有名なスドノ・サリム(林紹良)は、1916年福建省福清県海口鎮に生まれ、1938年に徴兵を逃れるため叔父を頼りインドネシアに渡ったとされる⁴⁵⁾。以下ではこうした事例として莆田市出身のC氏からサラワクのシブにおいて行った聴き取りを紹介する。

Q：1940年にどうしてこちらに來たのですか。

A：当時日本が侵入し、生活が困難になり逃げてきたのです。耕す土地も少なかったし、その他に国民政府が徴兵を行ったからです。抗戦のために家に子供が2人いたら1人、3人いたら2人を徴兵しました。

Q：兵隊となるのが怖くて逃げてきた人たちもいるのですか。

A：いますよ。とても多い。

Q：当時莆田の江口鎮にいたあなたはどのようにして南洋に來たのですか。

A：廈門のコロンス島⁹⁹からです。当時船が廈門のコロンス島に着いて初めて船に乗れました。当時埠頭は日本の軍人が歩哨に立っていました。我々は小さな船に乗ってこっそり大きな船に上がったのです。

Q：当時大きな船に乗るのにチケットを買う必要がありましたか。

A：小さな船に乗る前に買っておきました。

Q：日本が中国を占領していた時、南洋から中国へ手紙を書いたり、送金したりすることはできましたか。

A：できました。連絡できました。ただし連絡は少なくなりました。日本が南洋を占領すると連絡できなくなりました。

(C氏、1920年生まれ、祖籍：莆田県、シブ市、2011年11月23日訪問)。

太平洋戦争が始まると交通が遮断され南洋への逃亡は不可能となり、また国民政府も渡航の禁止を命令した(呉1994：151頁)。その後、第二次大戦後に内戦が勃発すると徴兵逃れの渡航も再開された。例えばサラワクのシブで事業に成功した范培堯という人物は、1927年に福州十邑の屏南県に生まれた。1947年1月に壮丁として県の徴兵処に送られたが、3月に母親が金を工面し買い戻してくれた。このままでは生きていけないと深く感じ、

母の命に従い南洋にいた母方の親戚を頼りシブに移民したという(范2000：47頁)。

なお、福建の民衆がみな南洋に渡航する機会をもてた訳ではない。例えば福州の南方に位置し華僑を多く輩出している仙游県の出身で、1949年に徴兵され国民党の兵士として台湾に渡ったX氏は「自分の村から華僑となった者はいなかった、金がない者は土地を耕すしかなかった」と語ってくれた(訪問時92歳、台北市、2012年2月17日訪問)。つまり海外にコネ・関係をもたない人々にとって、移民は容易なことではなかったのである。

おわりに代えて

20世紀初頭に実施された福州地区からシティアワンへの移民については、その募集においてメソジスト教会が主導的な役割を果たしていた。さらに移住先においても植民地政府と移民との間の仲介者となることに加え、教育や医療サービスを提供することを通じて教会は華人コミュニティの中核的役割を果たしたのである。ただし、たとえ教会の斡旋があったとしても、郷里を離れ海外への開墾団に参加することには不安が付きまとったはずである。それゆえ移民の招募には同族や同郷の絆も利用された。さらにゴム栽培の成功により開墾地が経済的に安定すると同族や同郷の絆を通じた後続移民が流入した。この段階になると地域の社会結合も教会の枠を超えて多元化し、各県県人を基礎とする同郷会やさらには華人全体を組織する中華総公会が成立したのである。

また人々が南洋に移民した背景として、聴き取りや口述記録において強調されたのは民国時期における福建の治安問題であった。福建では辛亥革命後北洋系の外来政権による統治が長期に亘り、外省軍隊が労働力を徴発するだけでなく、匪賊が身代金目的で民衆を誘拐した。さらに日中戦争時期に国民政府による徴兵が始まると、これから逃れるため一部の人々は南洋に渡航した。太平洋戦

争時期には交通遮断と政府による規制が相俟って渡航は不可能となったが、第二次大戦後の内戦時期となると、再開された徴兵を逃れるため南洋に移民した事例も確認できた。

最後に、キリスト教の教会が福建地域社会に対して果たした役割についても言及しておきたい。教会が南洋への移民ルートを提供したことは生存の道を模索する民衆に活路を与えたといえる。さらに牧師の家族の学歴・経歴の分析からは次のことが示唆された。すなわち貧困な階層が教会や教会学校を通じて社会的に上昇する事例がみられただけでなく、経済的には比較的安定した層であっても、教会が提供したミッション系の教育ルートはさらなる上昇を図るための重要な社会的資源となった。本稿で紹介できたのは沿海部及び閩江沿江を含む福州地区に関わる限られた事例であるが、そこからはキリスト教会の進出が基層レベルでの社会変容を促進しつつあったことが垣間見られたのである。

[注]

- (1)なお、筆者は以前福州地区から東マレーシアのサラワク州シブへの移民に関する調査報告を本誌に掲載した。山本(2010)。本稿はその続編に相当する。
- (2)このような視野からの貴重な共同研究として可児(1996)が挙げられる。また近年では篠崎香織氏の一連の研究や土肥(2010)が注目される。さらに『中国研究月報』2011年2月号においても園田節子氏を代表として「移住社会と中国との間で一近現代史における「華」を問う」との特集が組まれている。加えて中国と海外華人社会における抗日ナショナリズムの共振については菊池(2011)が参考となる。
- (3)Methodist Episcopal Church North, 中国名美以美会、後に衛理公会と改称した。メソジスト派は、18世紀にイギリスでジョン・ウエスレーによっ

て興されたプロテスタントの教派である。その特徴として、日課を区切った規則正しい生活方法や教育や医療、貧民の救済などの社会事業を重視することが指摘される。

- (4)例えば中国やマレーシアにおけるメソジスト派宣教師の原文書はアメリカ合衆国のニュージャージー州にあるDrew university内の The United Methodist Archives Centre に保存されている。筆者は2012年3月に当所を訪問し資料を閲覧した。また宣教師文書・キリスト教文献を使った地域社会史研究としては石川照子氏、蒲豊彦氏、倉田明子氏の業績が参考となる。
- (5)National Archives of Singapore the Oral History Centre (1 Canning Rise Singapore)。
- (6)ヘーアの事跡について満鉄東亜経済調査局は「彼は四州の支那人所有の鉱山、農園及び村落を巡歴調査し、華僑社会に均しく大勢力を扶植し、華僑対策上貢献する所多く」と高い評価を与えている(満鉄東亜経済調査局1941: 103~104頁)。
- (7)これについてはXing, Jung (1996) 第1章を参照されたい。
- (8)元来は福州閩侯県大湖郷後井村馬嵐山の虎退治の神である。シティアワンのsimpang dua(二条路)にも規模の大きな廟がある。
- (9)1948年6月にイギリス政府は「緊急法令」を発布、共産ゲリラを弾圧した。
- (10)「叻」とはシンガポールを指す。『叻報』は1881年に創刊された日刊紙である。
- (11)1849~1924年。閩清県出身、洗礼を受けて後、福州のメソジスト教会で働く一方で、科挙に応じ挙人となった。その後福建諮議局議員、辛亥革命後に福建省交通総長を務めた。
- (12)シンガポールの華人指導者で医師。生没1869~1957年。祖籍は福建省海澄県。シンガポールで生まれ、英国で医学を学んだ。華人参事会議員、後には厦門大学学長を務めた。

(13)シンガポールにおける福州人の集住状況については(山下1988:58頁)に詳しい。

(14)Trinity Theological College。1948年に聖公会、信義会(ルター派)、メソジスト派、長老派による合同神学院として設立された。

(15)「世界巨富林紹良」<http://www.millionbook.net/js/y/yAnxuzhi/sjfh/053.htm>, 2012年4月1日閲覧。

(16)コロンス島(鼓浪嶼)は厦門島に隣接する小島であり共同租界が置かれていた。1938年に日本軍が厦門を占領しても同島の租界は維持され、太平洋戦争勃発後初めて日本に占領された。

※補注:インタビューは筆者が中国語で行い、現地華人のP氏に記録を依頼した。本稿における人名は、シンガポール国立アーカイヴ所蔵のオーラルヒストリーや各種文献に依拠したものは実名とした。インタビューのインフォーマントについては匿名を原則とした。ただし宣道堂の廖克民牧師については、教会の歴史を公人としての牧師が語っていることに加え、廖氏が教会史の研究者であるため実名とした。

[参考文献]

- 石川照子(2000)「上海のYWCA——その組織と人のネットワーク」日本上海史研究会編『上海——重層するネットワーク』汲古書院。
- 可児弘明編(1996)『僑郷華南』行路社。
- 菊池一隆(2011)『戦争と華僑——日本・国民政府公館・傀儡政権・華僑間の政治力学』汲古書院。
- 倉田明子(2009)「中国における初期プロテスタント布教の歴史——宣教師の「異教徒」との出会いを通して」『アジア文化研究』35。
- 小林善文(2009)「南洋華僑陳嘉庚の興学事業」『神女大史学』26。
- 篠崎香織(2004)「シンガポール華人商業会議所の設立(1906年)とその背景——移民による出

身国での安全確保と出身国との関係強化」『アジア研究』50(4)。

土肥歩(2010)「招観海の「南捐」についての考察——東南アジア華僑・華人による恵愛堂への募金の構図」『年報地域文化研究』14。

満鉄東亜経済調査局(1941)『英領馬來・緬甸及濠洲に於ける華僑』。

山下清海(1988)『シンガポールの華人社会』大明堂。

山本真(2010)「華僑とキリスト教からみる福建近現代史——福建僑郷, サラワク訪問記」(『中国研究月報』64巻9号)。

山本真(2011)「福建省南西部農村における社会紐帯と地域権力」山本英史編『近代中国の地域像』山川出版社, 所収。

本堂設教九十周年記念刊編輯委員会(1987)『新加坡衛理公会福靈堂設教九十周年記念刊』。

陳利良主編(2003)『承伝福州精神: 福州人墾植実兆遠100周年記念』曼絨古田会館。

黄孟礼(2005)『福州人拓荒路』シブ(マレーシア), 詩巫福州公会。

廖克民編(2007)『宣教与歴史』ペラ(マレーシア)曼絨華人基督徒文化協会。

廖克民(2009)『“牧師楼”与社区領導: 実兆遠華人衛理公会社区権力変遷の個案研究(1903-1940)』シンガポール, 三一神学院。

錢進逸(2003)『実兆遠福州墾場百周年記念文集1903-2003』ペラ(マレーシア), 曼絨華人基督教文化協会。

錢進逸(2010)『從山区到橡膠園: 古田人移民拓土路』ペラ(マレーシア), 曼絨古田会館。

范培堯(2000)『馬來西亞・砂拉越 詩巫 范培堯南遷史略』。

福建省地方志編纂委員会編(1992)『福建省志華僑志』福州, 福建人民出版社。

福建省地方志編纂委員会編(1998)『福建省志人口志』北京, 方志出版社。

- 福州市英華校友會編印 (2006)『福州鶴齡英華中學校史第一卷 (1881-1951)』。
- 陳愛珍編 (1993)『馬來西亞基督教衛理公會華人年議會曼絨教區福清洋福清堂成立牧區四十周年紀念刊』。
- 施敦祥 (2003)『實兆遠的福州人 從歷史角度探討』ペラ (マレーシア) 曼絨古田會館。
- 實兆遠各社團學校追悼殉難僑領陳方江潘丁五位先生大會輯 (1946)『哀思錄』。
- 吳同永 (1994)「新加坡的福州人」,「福州地區華僑出國史略」(福州市華僑出國歷史學會編『福州地區 華僑出國史論文集』福州市華僑歷史學會)。
- 謝必震編著 (2004)『福建協和大學』石家莊, 河北教育出版社。
- 新加坡福州會館 (2010)『百年華路』。
- 徐天胎 (2009)『福建民國史稿』福建人民出版社。
- 葉見元 (1928)「改進閩北僑務趨議」『福州僑務公報』2, 3 合期。
- 余新恩編 (2003)『實兆遠甘文閣基督教衛理公會宣道堂設教百周年紀念特刊』甘文閣基督教衛理公會宣道堂。
- 周明欽主編 (2003)『曼絨華團聯合慶祝實兆遠福州墾場百周年紀念特刊』。
- 曼絨古田會館 (1994)『古田新大廈礼堂暨四十年慶典特刊』シティアワン, 曼絨古田會館。
- 朱峰 (2002)『基督教與近代中國女子高等教育——金陵女子大與華南女子大學比較研究』福建教育出版社。
- 『曼絨中華公會會史與會務發展』發行年不明。
- Xing, Jung (1996) *Baptized in the Fire of Revolution: The American Social Gospel and the YMCA in China, 1919-1937*, Bethlehem: Lehigh University Press.
- Coole, Douglas P. (1928) "Methosism in Sitiawan" *The Malaysia Message* Vol.38, No3.
- Lau, Earnest (2008) *From mission to church: the evolution of the Methodist Church in Singapore and Malaysia, 1885-1976*, Singapore: Genesis Books.
- Minute of the Twenty-second Session of the Malaysia Conference of the Methodist Episcopal church 1914.*